HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	〈翻訳〉F・W・グラーフ「序章 多くの分裂を孕んだ人物」 （「エルンスト・トレルチ 世界地平の中の神学者 一つの伝記」より）
著者	小柳，敦史; KOYANAGI, Atsushi
引用	北海学園大学人文論集(74): 125-144
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

〈翻訳〉F・W・グラーフ「序章　多くの分裂を孕んだ人物」（『エルンスト・トレルチ　世界地平の中の神学者　一つの伝記』より）

（訳）小　柳　敦　史

本稿はミュンヘン大学プロテスタント神学部名誉教授フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ博士の著書『エルンスト・トレルチ　世界地平の中の神学者　一つの伝記』（Friedrich Wilhelm Graf, *Ernst Troeltsch. Theologe im Welthorizont. Eine Biographie*, C. H. Beck, München, 2022）の「序章　多くの分裂を孕んだ人物」（Einleitung: Der Vielspältige）を訳出したものである。2023 年は，19 世紀終わりから 20 世紀初めに活躍したドイツの神学者・哲学者エルンスト・トレルチの没後 100 年にあたる。この記念すべき年を前にして，トレルチ研究の第一人者であるグラーフ氏による広範な評伝が出版された。

グラーフ氏が牽引してきた，トレルチの批判改訂版全集（Kritische Gesamtausgabe; KGA）の出版プロジェクトは全 27 巻の計画のうち 19 巻が刊行され，完成に近づきつつある。そして，そこに含まれる新たな資料も活用されることで，1980 年代以降，トレルチに関する多くの研究書が出版されてきた。しかしながら，トレルチの生涯全体を扱った評伝はこれまで，1991 年に出版されたドレッシャーの著作[i] しか存在しなかった。グラーフ氏による新たな評伝は，近年新たに確認された書簡や草稿などの新資料を基に執筆された記念碑的著作である。出来ることなら本書全体を翻

---

[i] Hans-Georg Drescher, *Ernst Troetsch. Leben und Werk*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1991.

訳して日本語を解する読者に提示したいところだが，600頁を超える大著なので，そのすべてをすぐに訳出することは訳者の能力では不可能である。そこで取り急ぎ，本書の問題関心を知ることのできる「序章」を訳出することとした。

「序章」はトレルチ没後の物語である。第1節では，アドルフ・フォン・ハルナックの弔辞の分析を中心に，葬儀の様子が描かれる。第2節では，葬儀の参列者や生前に関わりのあった人物の紹介を通じて，トレルチの活動領域の広さが伝えられる。第3節では，現在に至るまでのトレルチに対する評価の変遷が概観された上で，トレルチを「多くの分裂を孕んだ人物」(Der Vielspältige）として論じるという本書の基本方針が示される。以上で「序章」が閉じられた後，原著では全22章をかけてトレルチの生涯がその誕生から順にたどられていく。

従って，ここに訳出した「序章」において，トレルチはすでに死んでいると同時にまだ生まれておらず，主人公たるトレルチ自身の言動やテクストの分析は基本的にはなされない。しかしながら，時代状況および歴史的背景を可能な限り視野に入れながら神学的テクストを解釈し，その作業を元に神学的テクストを時代状況を読み解く資料として用いるという，グラーフ氏の〈神学史〉(Theologiegeschichte）の魅力は「序章」においても存分に発揮されている。この記述スタイルの特徴は，聖書の引用箇所の解釈にはじまり，20世紀初頭の知識社会の状況という同時代的コンテクストへも十分に目配りをした上で，手稿資料に残された感嘆符の数にまでこだわりを見せる，ハルナックの弔辞の分析において典型的に表れている。

ただし，そのようなグラーフ氏のテキストの魅力を拙訳が十分に表現できているかは心許ない。また，訳語の選択においても，特に官職名や葬送儀礼に関する用語など，訳者の乏しい知識では確信を持って決定できなかったものも多い。翻訳の間違いや適切な訳語についてご教示いただけると大変ありがたい。なお，聖書からの引用については，原則として『聖書　聖書協会共同訳』に従った。

（訳者記）

＊　　＊　　＊

弔辞

1923年2月3日土曜日，昼の12時頃のベルリンのヴィルマースドルフ。9ヶ月前の1922年5月11日に初めて開設された火葬場の中央大ホールは満員である。著名な学者や芸術家，影響力ある政治家やジャーナリスト，若い研究者や数多くの学生たちが，ある者は座り，ある者は立ちながらひしめき合っていた。今日では少数の人に記憶されているに過ぎないが，当時は最も高名な知識人の一人であったエルンスト・トレルチに別れを告げるためである。妻マルタと9歳の息子エルンスト＝エバーハルト，それからエルンスト・トレルチの弟ルドルフは，かつての陸軍元帥であり将来の大統領であるパウル・フォン・ヒンデンブルクの車で火葬場に向かっていた。マルタたちは，玄関ホールとなっている切妻様式の建物や前の庭でひしめき合いながら待っている人だかりの中を通っていかなくてはならなかった。そこにいる人たちはもはや中に入ることができなかったので，低く垂れ込めた灰色の雲の下，拡声器によって放送される葬儀に外で耳を傾けていた。彼らは8度そこそこの気温と，強い突風，激しいにわか雨に凍えていた。しかし，ホールの中もたいして暖かいわけではなかった。

弔問客の多くは動揺していた。「ここ数年で，エルンスト・トレルチの死よりも精神面でのドイツ（das geistige Deutschland）を揺るがした死はないと言っても過言ではない。この精神面でのドイツは今もなおドイツの核心であり，将来の再生の希望である」と，保守的な政治学者であり出版人であるアドルフ・グラボウスキーは，彼が編集していた雑誌『新しきドイツ』（*Das neue Deutschland*）の3月号に記すことになる[1]。「数百人規模の弔問客の集まり」[2]についての報道もあった。

2月1日早朝のトレルチの突然の死そのものが，近しい友人たちを心底驚かせ，多くの学問上の論争相手や政治的な敵対者たちをも動揺させた。1920年頃，世界的に最も有名なドイツの人文学分野の学者だったアドル

フ･フォン･ハルナックもまた目に見えてショックを受けていた。ハルナックは，カイザー・ヴィルヘルム協会の会長や，プロイセン邦立図書館長，ベルリン大学（フリードリヒ＝ヴィルヘルム大学）教会史講座主任教授としてではなく，プロテスタントの牧師の襟飾をつけた黒い僧服に身を包んで，キーワードを記した4ページばかりの原稿だけを頼りに「エルンスト・トレルチへの弔辞」を述べた。ほとんどの参列者は，この弔辞を，心を揺さぶり，琴線に触れ，とても故人に寄り添ったものであると感じた。「火葬場に遺体が横たえられるとハルナックが弔辞を述べた。冷淡なまでに抑制的だと陰口を叩かれることもしばしばであるハルナックだが，深く心をとらえる言葉を見出した」[3]と芸術史家のヴェルナー・ヴァイスバッハはかなり後年になってから回想している。ヴァイスバッハはトレルチの友人の一人であり，1890年代半ばにユダヤ教からプロテスタントに改宗した人物である。

前奏としてヨハン・セバスチャン・バッハの「おお永遠，そは雷のことば」がパイプオルガンで演奏されてから，ハルナックが14歳年下の友人に向けて追悼演説を行った。ハルナックはスピーチを「主の平和が私たちと共にありますように」という説教の挨拶によって始めた。そして続いて，イザヤ書40章1-2a節と6-8節から説教のためのテキストを朗読し，会衆が「アーメン」の声でそれを確認した。それからハルナックは葬儀の会衆に「喪に服している敬虔な皆さん」と語りかけた。ゲルハルト・テアシュテーゲンのコラールからの引用で説教を締めくくることによって，ハルナックは彼が述べたことを強調した。その後，ハルナックは会衆とともに主の祈りを唱えた。それに続いて新たな曲がパイプオルガンで演奏された。ハルナックは，葬儀の中で彼が司式をした礼拝の部分を，それに続く学問的および政治的な追悼演説から区別することを心がけた。

ハルナックによって選択されたテクストは，彼がトレルチの神学と心の信仰を熟知していることを認識させる。「おお永遠，そは雷のことば」は，ヨーハン・リスト作詞による讃美歌であり，1642年にリストの「天の歌」第四部に，「無限なる永遠性についての真摯な考察」として発表されたもの

である。葬儀の会衆はこの讃美歌を，死者が生涯に成したことへの仄めかしとして聞いたに違いない。なぜなら，リストの詞は，ヨーハン・ゲルハルトの1606年に出版された『聖なる黙想』の中の，「地獄ノ刑罰ノ永遠性ニツイテ。永遠ナル悪ノ苦痛」というタイトルを持つ50番目の黙想を改変したものだからである。1700年頃の古ルター正統主義の指導的な教義学者だったヨーハン・ゲルハルトは，ここでダンテの「地獄篇」から中心的なモチーフを採用している。それゆえ，リストの詞の第一節を読誦することでハルナックは，トレルチが博士論文を書いた際に主題とした人物であるヨーハン・ゲルハルトだけではなく，同時にダンテをも仄めかしたのだ。多くの葬儀参列者は，ハルナックがトレルチとともに，1921年7月3日に盛大なドイツ・ゲーテ祭典を催したことに思いを馳せたことだろう。トレルチはその祭典でハルナックに続いて，「浄化の山」について講演したのだった[4]。

説教のためのテクストの選択も注目に値する。イザヤ書40章1-2a節と6-8節によってハルナックは，プロテスタントの葬儀礼拝でとても大切にされていた，旧約聖書の預言者のテクストを選んでいる。

> 「慰めよ，慰めよ，私の民を」と，あなたがたの神は言われる。「エルサレムに優しく語りかけこれに呼びかけよ」(中略)「呼びかけよ」と言う声がする。私は言った。「なんと呼びかけたらよいでしょうか。」「すべての肉なる者は草，その栄えはみな野の花のようだ。草は枯れ，花はしぼむ。主の風がその上に吹いたからだ。まさしくこの民は草だ。草は枯れ，花はしぼむ。しかし，私たちの神の言葉はとこしえに立つ。

「エルサレムに優しく語りかけよ」という引用は，参列していた大勢のユダヤ人への呼びかけの試みだと読まれるべきである。さらに決定的なことは，時間と永遠の止揚不可能な緊張によって，トレルチが生涯をかけて取り組んだ中心的テーマを宗教的な反省の中心へと押し出す契機が，テクストを通して開けてくることである。テクストはハルナックに，「なんと呼びかけたらよいでしょうか」と，彼自身の役割を主題化する可能性も提供

する。さらに，不朽の永続的な神の言葉によって，プロテスタント的伝統のアイデンティティを構成するトポスが示される。そうすることで，ハルナックは友の哲学上の業績をも，そこに暗黙のうちに含まれているプロテスタント神学の構造のなかで理解しやすいものにすることができた。それに加えて，テクストは，あらゆる葬儀の基底にある慰安の契機を含んでいる。このようにして説教者は，キリスト教の葬送におけるレトリックの伝統的な要素，すなわちラウダティオ（讃美），ラメンタティオ（悲嘆），コンソラティオ（慰安）を取り上げた。

おそらく，参列者は全員が，説教者と故人が固い友人関係によってお互いに結びついていたことを知っていた。ハルナックは，まずは職業に特殊な役割という距離のうちに超然と留まることによって，人生におけるこのような近さに存する困難を抑えこんだ。説教の締めくくりの部分において初めて，ハルナックはトレルチと交わしたたくさんの会話に言及するに至る。ハルナックが友の「学問的遺言」だと定式化した『歴史主義とその諸問題』の結末部の文章を詳細に引用した後で，ハルナックは会話のなかでトレルチに発言させる。その後でハルナックは，トレルチの気難しく，すぐに人を傷つけ，また自身も傷つきやすい「人格」の特徴を描き出した。ベルリン日報に掲載されたスピーチの最終段落に従えば，説教者はそれから棺の方を向いたようである。ハルナックはここで死者に直接「愛しきかけがえのない友よ」と呼びかけて，改めて故人を悼んだ。「私たちはもう君に会うことはなく，もう君の声を聞くこともない。ああ，自然な感情を押さえつけるのはいかにつらく，いかに苦しいことか」[5]。

死者へのこの直接の呼びかけによって ── これは説教の草稿には見あたらない！ ── ハルナックはプロテスタントの説教学あるいは説教論の基本的な原則に抵触した。プロテスタントの伝統では，ヴィッテンベルクの宗教改革者以来，追悼説教は故人との仮想的なコミュニケーションを助長しないということが確定的なことだとみなされてきた ── 故人はもはや聞くことができないのだから。棺や墓の前での説教は厳密に，死者の今や確実に完結した個人的な人生の物語を，嘆き悲しむ会衆の前で宗教的に表象す

ることに役立つものでなくてはならない。会衆の絶望を言語化し，慰めを媒介するためである。それゆえに，追悼客の代表である公衆の前で（あるいは少なくともベルリン日報の学芸欄の読者の前で）友に直接語りかけるというハルナックのレトリック上の戦略には驚かざるを得ない。ハルナックは，親密な友人として，トレルチの死が彼にどれほどのショックを与えたのかを葬儀の会衆に向けて明らかにしようとしたのだろうか。それとも，死者へと直接語りかけたことは，「生きている者の神」についての慰めに満ちた福音に権威を持たせるための手段として用いられたのだろうか。「君がその下へと向かった神は，死んだ者の神ではなく，生きている者の神であり，神に受け入れられた死者は神の傍らで生きている」と，ハルナックはベルリン日報に掲載された講演録のなかで書いている。この一文もまた，説教の草案においてはどこにも示唆されていない。

この，友人への完全に非プロテスタント的な直接の呼びかけを度外視すれば，ハルナックはプロテスタントの葬送文化における伝統的な説教学の原則に，悠然と，極めて見事に従っている。すなわち，故人の個人的な人生の物語と，思想の道のり，そして敬虔の秩序体系を解釈し，独自性のうちにある普遍的な要素，すなわち個々人の人生の有限性が理解されうるようにしている。ハルナックの説教の構想から認識できるのは，説教者が自身の行為の限界を魅惑的なほどの精密さで意識し続けているということである。ハルナックはトレルチの学問面での伝記を，なんらかの完結した，完全に最終的に妥当する判断を下すことができるという仕草なしに主題化した。そしてハルナックは，解釈する私たちの理性の宗教的限界を繊細に際立たせる。「トレルチはどうやら，さらにとても多くの実りを約束していた彼の仕事から引き剥がされてしまったようです。しかし，一つの人生がその内側に留められるかどうかを誰が判断できるのでしょうか！」。なぜ疑問符ではないのだろう。なぜ説教者は草案においてこの箇所に確言的な感嘆符を書き留めたのだろう。草案中の記号は確かにもっぱらハルナック自身のためのものであるが，同時にレトリックのためのト書きであるとも考えられる。まさしくそこに，こうした記号を解釈する可能性がある。

弔辞のためのハルナックのキーワード集には全体として62個の感嘆符が認められる。大学教員および神学上の知識人としてのトレルチについて確認するいくつかの発言がある。それはハルナックにとってとりわけ重要であると思われるものだった。「古代と近代のあらゆる文献からの恐ろしいまでの消費力（トレルチが読んだもの！）」。「しかし，彼は異質な教義学者だった！学生や同僚たちはそのことにすぐに気がついた」。別の感嘆符は，筆舌に尽くしがたい喪失についての嘆きとして，説教者によって用いられているように見受けられる。「彼は人生には何か意味があること，そして歴史には意味があることを堅く信じていた！」。いくつかの箇所でハルナックは，二つあるいは三つの感嘆符を記している。「人間!!」，「南ドイツ人!!多血質！彼の頬が赤らむ!!」「道徳的なものの尊厳!!」「永遠的なものに私たちが慣れること!!」。いくつもの記述はハルナックにとって，三つの感嘆符を書きつけるほどに重要だった。「講義とゼミナール!!!」「彼の笑い声!!!」「鉱滓が十分にできた!!!しかし，それはただ彼の中で光り輝く金属の流れがとても大きいからなのだ」。ただ一つの語が四つもの感嘆符を与えられている。「自由!!!!」[6]。

イザヤ書のテクストの比喩によってハルナックは，このまごうことない断片的な人生という枯れてゆく草の中に，神の不朽の言葉，すなわち時間を超越した内実を可視化しようと試みた。ハルナックは葬儀の会衆に，友の神学上の根本的洞察を想起させようとしたのだ。生から死へと向けられた沈鬱な気分にさせる眼差しは，死から永遠へと向かう眼差しのために超越されなくてはならない，という預言者の言述はハルナックにとって，歴史の流れのなかの超歴史的な拘束力を求める，トレルチの穏やかならぬ不断の努力を，プロテスタント的な反省の地平に書き込むために役立った。ハルナックがスピーチした相手の会衆の生活世界は一般に，大学，研究所，そしてアカデミーに規定されていた。説教者は一般的なこと，すなわち，ベルリン大学とプロイセン・アカデミーがここ二年の間に被ったつらい喪失から話を始めた。アイヒェンドルフの「私たちの眺めるものは変わっていく」── アルバン・ベルクが1904年に新たに曲をつけた ── の最初の二

節の引用に続いて，ハルナックはトレルチを，永遠なる神の言葉を求めて格闘した神学者として評価する。学問上の伝記の描写は，トレルチの個人的な敬虔さの記述へと到達する。ベルリンの歴史哲学者もまた，「私たちの福音主義的なキリスト教の伝統の核心」と「赦し」の必然性についての知を保持していたのである。

1905年5月にエルンスト・トレルチは故郷の街の市役所の黄金のホールにて，アウクスブルク・シラー祭のための祝辞を述べた[7]。ハルナックはそのことも仄めかす。「思考は私の計り知れないほどの王国であり，言葉は私の翼の生えた道具だ」という表現は，シラーの1804年の詩「芸術の忠誠」に由来する。ハルナックがこの表現を記憶から呼び起こし，わずかに変形して書き込んだのは，トレルチの哲学的反省を特に規定するものを特徴づけるためであった。それは，諸現象からなる所与の世界を，思考からなるコスモスとして反省によって見通すことである。

最後の祈りの前に，ハルナックはゲルハルト・テアシュテーゲンによって1745年に生み出されたコラール「今や一日が終わった」の最終節を引用した。「どの日もその翌日に伝える。／私の人生は放浪，／偉大な永遠へと向かう。／ああ，永遠よ，なんと美しい。／私の心を君に慣れさせよう。／私のふるさとはこの時間のうちにはない」。このテアシュテーゲンとの関連づけもまた，トレルチの神学プログラムと，そのプログラムに反映されている敬虔に対する説教者の高い感受性を認識させる。テアシュテーゲンはトレルチにとって，ドイツ改革派教会の最も重要な神秘主義者であり，ヨアヒム・ネアンダーと並んでドイツ改革派教会で最も影響力ある作詞家であるとみなされていた。プロテスタンティズムの文化的意義についての歴史学的著作においてトレルチは，「心ある詩人テアシュテーゲン」は「諸宗派を超えてはっきりと自分の立場を決め，魂の選ばれた指導者として神の友を集めた」と述べた[8]。このようにしてハルナックは暗黙のうちに，あらゆる宗派のかなたにある神との神秘的な直接性に対するトレルチの高い評価をも主題化したのである。

残念ながらオルガンでの二つめのコラールの後では他にさらに多くの講

演者が悲しみを表明しなければならなかった。それゆえ，ハルナックの感銘を与える語りにもかかわらず，葬儀はすぐに沈鬱な雰囲気の式典となった。「エルンスト・トレルチの葬送の際に講演者以外のおそらく私たち全員が受けた苦悶」を，テオドール・ホイスは14年後にもなお思い出している[9]。

プロイセン科学アカデミーの物理学・数学部門の事務長として，ベルリンの生理学者マックス・ルブナーがトレルチに敬意を表した。トレルチは死の直前である1922年11月30日にはじめて，アカデミーの正会員に選出されていたのだが，その空間に足を踏み入れることはもはやできなかった。フリードリヒ・ヴィルヘルム大学を代表して，学長である医学者アルトゥール・ヘフターが，そして哲学部を代表して哲学者・教育学者であるエドゥアルド・シュプランガーが話した。ハイデルベルクで共に過ごした時期からすでに故人をよく知っており，1922年からベルリンで教えていた歴史家エーリヒ・マルクスは，1914年にトレルチをバイエルン科学アカデミーに受け入れることに携わった人物である。彼が，かつての学長かつバーデン州上院議員が亡くなったことに対するハイデルベルク大学の悲しみを表明した。トレルチの学生であったアルベルト・ディートリヒの登場はさらにつらいものだった。ディートリヒは，そのあまりに長すぎる話のなかで，感情の高まりを避けるすべを心得ていなかった。左派リベラルのドイツ民主党（DDP）の指導的な政治家であり，トレルチ夫妻と親しい友人であったドイツ国財務大臣兼法務大臣オイゲン・シファーは，フリードリヒ・ナウマンとマックス・ヴェーバー亡き後の党が，そして共和国全体が，影響力ある先駆的思想家を再び失ってしまったことを嘆いた。新聞報道からは，この後さらに政治機関や学生団体の代表者たちが発言したことが推測される。「ドイツの大学の代表者たちが，感動的な言葉で偉大な教師との別れを告げた。学生団体の代表は偉大な指導者を失ったことの心痛を表明した。故人の個人的な友人たちは棺に最後の挨拶を手向けた。〈ドイツ民主党〉，政府の代表者，ならびにその他の公的な人物たちは，最後の機会にトレルチの人柄を褒め称えた」[10]。

ベルリンの国民経済学者ルートヴィヒ・ベルンハルトは，以上のような語りを陳腐化だと感じた。葬儀の日のうちに，ベルンハルトはハルナックに宛てて次のように書いた。「トレルチに向けたあなたの語りが私に感銘を与えたので，私はあなたに対して私の感動を表現せずにはいられません。あなたの言葉の力強さと美しさはあまりに偉大で，私は「ドイツのなかでこのように話すことができるのはただ一人なのではないか？」と繰り返し自問しました。語りえないものをまったくシンプルな言葉によって感じ取らせ，それによって聴衆が巻き込まれざるを得なくし，そしてあなたの魅惑的な力を全員に投げかけるのは，あなたに特有のわざです。それだけに，あなたの後にまったく陳腐な調子で語られることが許されたことは，私をとてもつらい気持ちにさせました」[11]。

生活世界と葬儀の会衆

死を悼む人たちの豪華な集まりは，エルンスト・トレルチを形成し，トレルチ自身が多かれ少なかれその形成に決定的な仕方で参与してきた生活世界の複雑な多様性を反映していた。エルンスト・トレルチは1922年以来，フリードリヒ・ヴィルヘルム大学哲学部の学部長であった。トレルチは学部長への選出を，学部内の政治的に右派の教授たちや，急進的ナショナリストの教授たち，反デモクラシーの教授たちによって自分が以前よりも受け入れられたことのしるしと解釈した。そうした教授たちは，トレルチの親共和国的な姿勢や，とりわけドイツ民主党への参与を非難していたのである。在職中の学部長が死んだ際に，哲学部の多くの教授たちが，トレルチの葬儀に参列するべき義務を感じたのは驚くようなことではない。確かに，その当時は数学・自然科学講座もその一部であったフリードリヒ・ヴィルヘルム大学の哲学部の58人の教授全員が出席したわけではない。しかし，多くの教授たちが，トレルチの敵対者たちすらも臨席したのは驚くべきことだった。

学部の同僚の輪のなかから，まずは親しい友人やよく知る間柄の人が挙

げられる。とりわけ,遅くとも1901年以降はトレルチと意見を交わし合っていた歴史学者フリードリヒ・マイネッケと，国民経済学者ハインリヒ・ヘルクナーである。彼らはそれぞれの妻と共に葬儀に来ていた。フランス革命を専門とする優秀な女性歴史学者ヘドヴィク・ヒンツェ ── 彼女は1933年にユダヤ系であるという理由でドイツを追われる ── は，1916／17年の冬学期以来，トレルチのゼミナールに熱心に参加していた。彼女は夫であり，国制史・行政史・経済史および政治学講座の主任教授を担当していたオットー・ヒンツェと一緒に来た。トレルチはオットー・ヒンツェのことも高く評価しており，彼らはいくつもの夕べを共に過ごしてきた。東欧史家のカール・シュテーリンもとりわけ悲嘆にくれていた人の一人に数えられる。シュテーリンはかつて，アウクスブルクの聖アナギムナジウムでトレルチと同級生だった。その他に，以下のような人たちも参列していた。ハルナックの義理の兄弟である軍事史家ハンス・デルブリュック。彼の編集していた雑誌『プロイセン年報』に，故人は何度も投稿していた。そして，トレルチの引き立てによって教授へと昇進した，労働運動についての社会民主主義的な歴史家であるグスタフ・マイアー。彼はリベラル・プロテスタントの知識人政治家を，その政治的な勇気を理由として賛美していた。非常に多くの読者を獲得した近代資本主義についての理論家である社会科学者ヴェルナー・ゾンバルト。彼は，自身のベルリン大学への招聘の決め手となったのがエルンスト・トレルチの所見であることを知っていた。さらに，農業史家マックス・ゼーリンク，トレルチと懇意にしていたゲルマニスト・文学研究者であるコンラート・ブルダッハ，ロマンス語学者・ダンテ研究者のエドゥアルト・ヴェヒスラー，心理学者ヴォルフガング・ケーラー，新カント派の哲学者アロイス・リール，医学の素養のある心理学者・哲学者であり，そのゼミナールでは時おりシュテファン・ゲオルゲが詩を披露していたマックス・デソワールも来ていた。アルバート・アインシュタインも葬儀に姿を現した。

トレルチの死は，単なるローカルな，すなわち一地域の学術界の出来事を超えるものだった。トレルチをよく知り，また親しかった教授仲間が大

勢，故人に敬意を表するための長旅を自らに課した。ミュンヘンからは，ロマンス語学者カール・フォスラーが来た。ハイデルベルクからは，優れた新約聖書学者であるマルティン・ディベリウスと，ユダヤ教からプロテスタント教会へと改宗した哲学者・神学者であるハンス・エーレンベルクが到着した。エアランゲンから来ていたのは親しい友人であった哲学者パウル・ヘンゼルと，企業家ロルフ・ホフマンだった。トレルチは，1922 年に設立されたホフマンのブルクベルク哲学アカデミーに，理事長として責任を負っていたのである。

トレルチは，リベラル左派の「ドイツ民主党」のベルリンの候補者リストの一位でプロイセン国民議会選挙に立候補して当選しており，党大会の講演者としてもドイツ民主党に参与していた。それゆえ，多くのドイツ民主党指導者の姿が見られたことは驚くべきことではない。オイゲン・シファーと並んで，(同様にユダヤ教からプロテスタント教会へと改宗した)国会議員ゲオルク・ゴータインがやってきた。ゴータインは 1921 年以来，反セム主義防止協会の代表であった。さらに，市民階級の女性運動に参与していた国会議員であるゲルトルート・ボイマー，社会政策家マリー・バウム，それからハルナックの娘アグネス・フォン・ツァーン＝ハルナックもやってきた。ツァーン＝ハルナックは，フリードリヒ・ヴィルヘルム大学に女性として初めて ── 1908 年に ── 入学することができた人物である。それからもちろん，エリー・ホイス＝クナップも，夫テオドールを伴ってそこにいた。彼女は，トレルチとともに何度もドイツ民主党の選挙演説会に参加していた。トレルチが支援していた民主主義学生同盟から来ていた学生に数えられるのは，トレルチの授業の受講者だったエルンスト・レマーと，歴史学徒であり，テオドール・モムゼンの孫であるヴィルヘルム・モムゼンである。エーリッヒ・アウエルバッハ，ハンス・バロン，ゲルハルト・マズア，ハンス・ヨナスといった若きユダヤ系知識人たちも，彼らの学問上の教師への誠実さをはっきりと示していた。

プロイセンの学問・芸術・国民教育省の次官補，後には政務次官として，トレルチは 1919 年 3 月から 1921 年 4 月までプロイセン州政府の一員で

あった。葬儀に際して，1921年11月から1925年1月までプロイセンの文部大臣を務めた，リベラル右派のドイツ人民党に所属するオットー・ベーリッツと，将来のプロイセン国務長官であり1921年には学問・芸術・国民教育大臣であったカール・ハインリヒ・ベッカーが政府を代表した。ベッカーはトレルチより11歳年少の傑出したオリエント学者であり，1902年から1908年にはハイデルベルクでの時間を共に過ごしていた。この時からすでに，ベッカーはトレルチから目をかけられていた。

第一次世界大戦中，トレルチは帝国宰相テオバルト・フォン・ベートマン・ホルベークの重要な政治的助言者だった。同様に，帝国最後の宰相マックス・フォン・バーデンとも親密な関係を保った。バーデン大公国上院の構成員として初めて議会活動をした時から，トレルチはマックス・フォン・バーデンをよく知っていたのである。ベルリンに異動してからのトレルチはマックス・フォン・バーデンに何度も長い手紙を送り，軍事的および一般的な政治状況や，帝国の首都の政治家階級や学術的エリートのなかで対立を引き起こしていた戦争目的をめぐる論争について情報を提供した。それゆえ，葬儀に際してドイツ政府も公式に代表を送ることを望んだのは驚くべきことではない。トレルチの友人であり，当時の運輸大臣だったヴィルヘルム・グレーナーが最初の妻であるヘレーナと一緒に来ており，ドイツ政府を代表して，黒・赤・金のリボンをつけた花輪を棺に供えた。グレーナーの近くには，社会民主主義の憲法学者グスタフ・ラートブルッフが立った。

ハイデルベルクからベルリンへの異動によってトレルチは――この葛藤をはらんだ歴史についてはさらに後で語られることになる――，神学部から哲学部へと移った。それでもなおトレルチは，神学的な討議において一層力強く存在感を保ち続けた。それだけに，いろいろな意味で敵視された，慣例を脱したトレルチの《近代的神学》を決然と批判した者たち自身が，突然に人生から引き離された者に，あらゆる学問的な意見の相違にもかかわらず，最後の敬意を示すことを内的に義務だと感じたのだった。ベルリン大学のサークルの中で，美しく，しかも明晰であるがゆえに憧れの的だっ

た女性神学生マーゴット・ハールは，トレルチをフリードリヒ・ヴィルヘルム大学で最上の雄弁家だとみなしていた。彼女が長い会話の中でこだわりを見せたのは，組織神学者アルトゥーア・ティティウスとならんで，ベルリンの神学者のなかでトレルチにもっとも強硬に対立していた教会史家カール・ホルすらも葬儀に参列したことであった。牧師の娘であったハール自身も，当時の友人で，組織神学の私講師でありサロンの社会主義者だったパウル・ティリッヒの同伴者として姿を現した。ティリッヒは，この日の晩に，『フォス新聞』に追悼文を発表することができた。ティリッヒがハルナックの弔辞を聞きながら泣いていたとき，トレルチの最後の助手の一人だったルートヴィヒ・マルクーゼも，もはや涙を押し止めることができなかった。

長年にわたりトレルチと親しかった友人の多くは，葬儀のためにヴィルマースドルフまで来る力を奮い起こすことができなかった。フリードリヒ・ナウマンの義理の兄弟であり，リベラル・プロテスタントの指導的な週刊紙である『キリスト教世界』の編集者だったマルティン・ラーデは，前衛的なまでにラディカルであった若き組織神学者トレルチをすでに支援しており，プロイセン国民議会のドイツ民主党議員団における一般的な政治活動によってもトレルチをとてもよく知っていた。ラーデは，2月3日，マールブルクの彼の学者机から離れず，尊敬する友人の文章をもう一度読んだのだった。Duで呼び合う親しい友人だったカール・ノイマンの物語は明らかにさらに劇的だった。ノイマンはマンハイムの裕福なユダヤ人家庭出身のハイデルベルクの美術史家で，ヤーコプ・ブルクハルトの腹心の弟子であり，かつトレルチの熱狂的な崇拝者であった。それまでの数ヶ月の間に二度の自殺未遂をした後だった彼は，友人の死を知った時，深刻な虚脱状態に陥ってしまった。それゆえ，ノイマンはハイデルベルク大学の精神病院へと入院しなければならなかった。退院後，ノイマンはトレルチのために誰の心をも捉えるほどに思いやりのある追悼文を書いた。ノイマンはトレルチがベルリンに異動した時には別れの夕べを企画し，そこにはハイデルベルクの街の名士たちの代表者が数多く出席したのだった。

トレルチの愛弟子の一人である神学者オットー・フロメルは，トレルチのハイデルベルクでの最初の講義をすでに聴講しており，「芸術と宗教」をテーマにした夕方の少数向けゼミにも数学期にわたって参加していた人物である。彼は，ハイデルベルクの都市教区牧師として，ベルリンには向かわないことを決断した。すなわち，フロメルは葬儀の時間の間，父親のようであった友への追悼文を書くために自分の仕事部屋にこもったのである。

軽蔑され，忘れられたが，片付けられたわけではない

トレルチが死んでからの数日および数週の間に，ヨーロッパの新聞と雑誌，ならびにアメリカ合衆国のいくつかの雑誌に，140を超える追悼文が発表された。葬儀の会衆の大きさや，追悼文の尋常ではない多さを強調したい。エルンスト・トレルチは彼の名声の頂点で亡くなったのである。しかしながら英語圏と日本とは異なり，ドイツではすでに死後まもなく，自由主義者として追放され，1933年以降一般には忘れ去られた。1920年代後半以降，トレルチの本の売れ行きは明らかに下がっていた[12]。この事態は第一に，「学問における精神的革命」── 1921年にトレルチ自身がそう呼んでいる ──，すなわち，ブルジョワ的で相対主義的だとして軽蔑された近代的歴史主義に対する反リベラルなフロント世代の知識人たちの反乱と関係がある。

戦間期のプロテスタント神学における反歴史主義革命の若々しい主唱者たちは，自分たちを真のキリスト教信仰と宗教改革的神学の精神で神学を刷新するアヴァンギャルドだと理解していた。それゆえ，カール・バルトやフリードリヒ・ゴーガルテンのような神学者たちはトレルチのなかにもっぱら，歴史主義的に相対化する思考様式によって実存的に重大な事柄である信仰の実質を規範的に拘束力のないものに解消してしまう，ブルジョワ的な文化プロテスタンティズムを見たのである。しかしこれは，まさしくベルリン時代のトレルチが，彼の知的エネルギーの大部分を，あら

ゆる「文化価値」の歴史的・文化的な相対性への歴史学的認識という条件の下で，個人を超える拘束力ある規範性を根拠づけることに注いだことを念頭に置くと，不条理な非難である。

プロテスタンティズムの批判者マルティン・ハイデガー ── トレルチの集中的な読者だった ── や，カール・シュミット（彼も同様にトレルチをとても集中して読んでいた）のようなこの時代の新たな哲学の〈存在の思想家たち〉もまた，ヴァルター・ラーテナウの友人でありかつ多くのユダヤ人学生の教師だった人物ときっぱり距離をとった。共和国に対する保守的な反対者とフェルキッシュなラディカル・ナショナリストは，ドイツの政治思想の伝統を西欧的な政治理論の自由で民主主義的な指導理念に向けて開け放とうと試みた，「ヨーロッパ的文化総合」の理論家を必要としなかった。国民社会主義はなおさら，さまざまな分断における，異なる思想を持つものへの寛容，つまり敬意と，数多くの異なる者たちの妥協への用意に基づく自由な共生の秩序についての，共和国を信頼する思想の大家とみなされた知識人への関心をまったく持たなかった。国民社会主義は，その攻撃的な記憶の政治によって，エルンスト・トレルチの思い出を消し去ることに首尾よく成功した。トレルチの弟子であるヴァルター・ケーラーが，ハイデルベルク大学教会史講座の主任教授としてある種の国内亡命をしていた 1941 年に，今日でもなお読むべき価値のある，エルンスト・トレルチについての伝記的な色彩を帯びた初めての比較的長いモノグラフを出版してはいたのだが[13]。

「トレルチ・ルネサンスは必ずいつか起こる。トレルチの問題は断ち切られてしまったが，片付けられたわけではない」と，エドゥアルド・シュプランガーは 1951 年のフリードリヒ・マイネッケ宛の手紙で予測した[14]。しかしながら，哲学的な議論においてトレルチはまだ一般には忘れられたままである。それに対して，大学でのプロテスタント神学においては，ハーヴァードで教えていたユニテリアンであるジェームズ・ルーサー・アダムズが 1974 年に「トレルチ・リヴァイヴァル」を断言した[15] ── もっとも，それはアメリカ合衆国とイギリスに適用されたものであった。そうした地

での議論が圧力となって初めて，1970 年代後半以降，トレルチに対する関心はドイツ語圏でも再び大きくなった ── まずは，歴史家たちとローマ・カトリックの神学者たちにおいて。ミュンヘンのカトリック神学者カール＝エルンスト・アプフェルバッハーは，1978 年に出版された博士論文の序文において次のように述べた。「エルンスト・トレルチのライフワークが神学外で，とりわけ宗教社会学と歴史学において獲得している多大なる名声は，専門的な神学上の討議内部で広く流布している〈トレルチ忘却〉と奇妙なコントラストにある。最近になってやっと，トレルチを捉えていた問題が，新たに神学的な根本問題として到来することがどれほど再び予告されているのかが明白に意識されるようになった」[16]。実際にそれ以降，討議の状況は根本的に変わった。これまで知られていなかった数多くのトレルチの出版物が確認できるようになった著作目録を基盤として，1998 年から 27 巻の目標で批判校訂版全集（*Troeltsch* KGA）が刊行されている。「近代的神学者」および文化理論家としてのトレルチは，まさに多様な民族と複数の宗教を含む社会において再び注目されるべき存在である。

プロテスタント神学者，歴史家，社会理論家，文化哲学者，ある時期は政治家，そして公に開かれた知識人であったエルンスト・ヴィルヘルム・トレルチの人生は，ここでさまざまな仕方で物語られるべきである。第一に，伝統的な信仰と近代的な学問の間の認知的不協和についての魂の厳しい格闘のなかで苦労を重ねた，とても矛盾した神信仰を持つ者，すなわち，とても特殊な方法での敬虔さを持った神秘主義者の物語として。第二に，神学という狭い学問領域の境界をいろいろな意味で越え，実にさまざまな議論において存在感を示した，魅力的で生産的な知識人の物語として。第三に，五歳の時には，ドイツ帝国の設立に向けられた父の感激を共にし，1918 年に帝国が終わりを迎えた後には，右派からも左派からも脅かされていた共和国のための社会道徳的土台を据えようと尽力した，学者政治家かつ政治的知識人の物語として。最後に第四として，自分の基本的な矛盾性に，おそらくは誰よりもたくさんかつ徹底的に，少なくとも誰よりも反省的に苦しんだ一人の人間の物語として。倫理学についてのトレルチの文献

では,「多くの分裂を孕んだもの」(das Vielspältige)の概念が中心的な役割を演じている。これは,自分自身についての終わることのない不確実性を熟慮するしるしでもあり得る。カール・ノイマンは,五歳年少のとても親密な仲だった友人の死の後にこう記した。「トレルチは次々に入れ替わる場面上で,次々に入れ替わる敵対者と格闘した。何より,彼は自分自身と格闘した。私たちは人格の全体性や統一性を追い求める。しかしながら,多様な形態をとり,何度も変化する生は,私たちを揺さぶり引き裂く。それゆえ,矛盾が私たちの運命なのだ」[17]。

略号

NB　Ernst Troeltsch in Nachrufen. Hg. von Friedrich Wilhelm Graf unter Mitarbeit von Christian Nees (Troeltsch-Studien Band 12), Gütersloh 2002.

原注

1 Adolf Grabowsky, Ernst Troeltsch, in: Das neue Deutschland 11 (1923), 39–42; nun in: NB, 411–416, 411.

2 E. B., Zum Tode Ernst Troletschs, in: Augsburger Neueste Nachrichten. Schwäbischer Kurier, Nr. 32, Mittwoch, 7. Februar 1923, 3; nun in: NB, 283–286, 286.

3 Werner Weiswach, Geist und Gewalt, Wien/ München 1956, 246.

4 Ernst Troeltsch, Der Berg der Läuterung. Rede zur Erinnerung an den 600jährigen Todestag Dantes gehalten im Auftrage des Ausschusses für eine deutsche Dantefeier am 3. Juli 1921 in der Staatsoper zu Berlin, Berlin, 1921.

5 Adolf von Harnack, Rede am Sarge Ernst Troeltschs, in: Berliner Tageblatt Nr. 61, 6. Februar 1923, Morgen-Ausgabe, 2f.; nun in: NB, 266–271, 270.

6 Adolf von Harnack, Konzept für die Rede am Sarge Ernst Troeltschs, Staatsbibliothek Berlin, Nachlass Adolf von Harnack, Kasten 12, Nr. 1379; nun in: NB, 231–241.

7 Ernst Troeltsch, Schiller, sein Werk und das deutsche Volk, in: Augsburger Abendzeitung Nr. 128, Dienstag, 9. Mai 1905, 1–3.

[8] Ernst Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen [1912], hg. von Friedrich Wilhelm Graf in Zusammenarbeit mit Daphne Bielefeld, Eva Hanke, Johannes Heider, Fotios Komotoglou und Hannolore Loidl-Emberger (KGA9), Berlin/Boston 2021, 1748.

[9] Theodor Heuss, Erinnerungen 1905–1933, Tübingen 1963, 372.

[10] Die Beisetzung Ernst Troeltsch, in: Berliner Tageblatt und Handels-Zeitung Nr. 58, Sonnabend, 3. Februar, 1923, Abend-Ausgabe, 2.

[11] Ludwig Bernhard an Adolf von Harnack, 3. Februar 1923, Berlin, Staatsbibliothek, Nachlass Afolf von Harnack, Kasten 27, Bl. 33.

[12] Gangolf Hübinger, Ernst Troeltsch und die politische Kulturgeschichte Europas, in: Ders., Engagierte Beobachter der Moderne. Von Max Weber bis Ralf Dahrehdorf, Göttingen 2016, 130–166, 148f.

[13] Walther Köhler, Ernst Troeltsch, Tübingen 1941.

[14] Eduard Spranger an Friedrich Meinecke, 26. Mai 1951, in: Friedrich Meinecke. Ausgewählter Briefwechsel, hg. und eingeleitet von Ludwig Dehio und Peter Classen (Friedrich Meinecke Werke Bd. VI), Stuttgart 1962, 627–631, 630.

[15] James Luther Adams, Why the Troeltsh-revival?, in: Unitarian Universalist Christian 29 (1974), 4–15.

[16] Karl-Ernst Apfelbacher, Frömmigkeit und Wissenschaft. Ernst Troetlsch und sein theologisches Programm (Beiträge zur ökumenischen Theologie Bd. 18), München/Paderborn/Wien 1978, 5.

[17] Carl Neumann, Zum Tode von Ernst Troeltsch, in: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte I (1923), 161–171: nun in: NB, 465–473, 473.

＊　本翻訳は JSPS 科研費 18K12217 の助成を受けたものである。